

THE IWAKUNI DAILY NEWSPAPER

令和5年(2023年)6月10日 (土曜日)

日刊いわくに

| | |
|-----|---|
| 購読料 | 発行所/株式会社日刊いわくに 〒740-0012 岩国市元町三丁目6-23 電話/0827-30-1892 EJ-@iwakuni@sky.plala.or.jp FAX0827-30-1100 |
| 1部 | 90円 |
| 1ヵ月 | 1,650円 |

墓石ギャラリーにお越しください。

有限会社 江先石材店

岩国市室の木5-8-5 2号線沿い 桜地蔵様よこ

安震はかもり フリーダイヤル **0120-21-3575**

免震施工 正規代理店 Tel 0827-21-3577 Fax 0827-21-2784

滴るような緑に包まれる

宇野千代家 きょう「薄桜忌」

岩国市川西2丁目、宇野千代生家の管理事業を行っているNPO宇野千代生家(西村宏理事長)は8日午前、生家で理事会を開き、令和4年度の事業報告、決算を承認した。近く開く総会でも承認を得る。梅雨を迎え、雨の多い毎日となつて岩国を訪れる観光客や生家の来頭書数にも影響を与えているが、生家の庭は滴るような多様な緑に包まれており、西村理事長をはじめ、理事たちは「一年を通して、この季節の庭が一番生き生きしています。多くの方に観ていただきたい」と話している。きょう10日は宇野千代の命日「薄桜忌」。



宇野千代生家は千代(1897~1996年)が昭和49年(1974年)、ほぼ昔のままに修復した。母屋は明治初期(1868~1911年)に建てられたと伝わる町家で、旧山陽道脇道に面して建っている。木造、瓦ぶき。入母屋造りの建物に切妻造りの台所、和室、風呂(五右衛門風呂)などが付属している。出格子、軒などは岩国藩の町家に共通した意匠があり、国指定の登録文化財ともなっている。現在は市が所有、委託を受けたNPOが開放事業を担っている。

約300坪の庭は千代が好んで植えたモミジや小松、薄緑豊かな庭

淡桜のモデルになった岐阜県本巣市(根尾村)に由来する薄墨桜が豊かに繁り、地表を覆うスキコケとあいまって深い森を思わせるような景観を生み出している。秋が深まるとモミジが真っ赤に染まり、毎年開かれる紅葉茶会には多くの人が集まるが、夏を前にした梅雨時期の庭の緑も「絶景」という評判が広がっている。

NPO宇野千代生家によると、令和4年度の入館者総数は2653人だった。コロナ禍以来、大きな落ち込みが続いてきたが、3年度の1552人と比べ1000人以上増える結果となり、NPOを安心させた。「新型コロナウイルスによる行動制限がなくなったことで来館者数は回復傾向にある。このまま順調に増えてくれるとありがたいですね」と期待していた。

生家では千代の代表作を原作とする映画「おはん」の関連品や千代の足跡を紹介する「西村理事長」と話している。

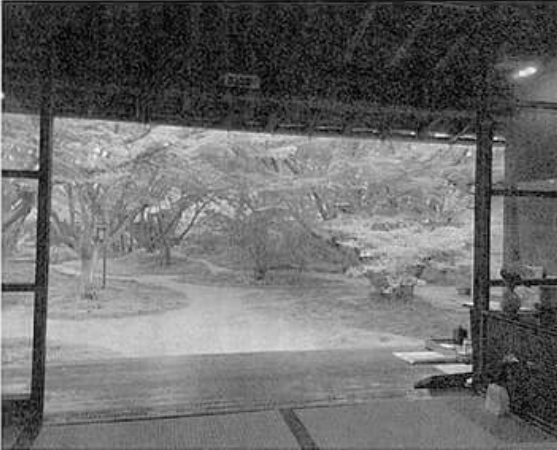
生家内で行われた理事会

資料などを展示しており、来館者は庭を堪能した後は生家内の展示物や調度、家の造りなどを丁寧に見て回る。千代を映像で紹介するビデオコーナーも人気だ。

昨年は11月18、19日の2日間、庭のライトアップ事業を行い、さらに幻想的な景観となった庭を来館者が楽しむ姿があった。「今年もライトアップができるよう取り組みたい」と話している。

生家を管理しているNPOはボランティアによって支えられ、当番制で庭の手入れを入念に続けている。細やかな人の手が入ってこそ、清涼な状態の庭の環境が保たれていることに西村理事長は「皆さんの献身的な努力のおかげです。しかし会員の高齢化も進み、運営の厳しさも感じています。活動に理解を示してくださる方がお仲間になっていただけたらうれしいですね」と呼び掛けている。

生家は欽明路道路沿いの「ビッグモーター岩国店」の裏手にある。錦川清流線川西駅から徒歩7分。駐車場を備



清流

「宇野千代の明窓浄秋海棠」

「明窓浄秋(めいそうじょうき)」とは明るく、塵一つなく清潔で勉強できる書斎を意味する。作家・井伏鱒二は「秋風集」の中で「自分は郊外に家を建て、思索に耽りたい。明窓浄秋の境地を念じたいのである」と書いた。物書きにとって理想的な空間ということだろう。

「秋海棠(しゅうかいどう)」は日本庭園でよく見られる植物。秋になると、ペゴニアにとてもよく似た、咲き進むにつれて風情のある花を咲かせる。秋の季節を詠う季語として俳人や歌人に愛されてきた。正岡子規が病床で、その美しさを詠んだことも知られる。

冒頭の句を詠んだのは岩国俳句協会の会長・島津教恵(しまづ・みちえ)さん。2年前に発行された自身の句集「正面」に掲載された。島津さんは宇野千代の文学作品をこよなく愛する宇野千代顕彰会の会長でもある。宇野千代生家を訪れた方なら、この句を詠んだだけで、ある情景が頭に浮かぶはず。庭に向けて置かれた文机には原稿用紙と文鎮代わりの刀のつば、その脇に長短20本程度の6B鉛筆。柔らかい芯の鉛筆はきれいに削られ、いつも主が文を書けるよう整えられている。この文机に向かつて名作を紡ぎだした千代の筆遣いが伝わってくるようだ。目の前に広がるのは、小さな森のような庭。ここで過すひとときは千代が晩年好んで使った「幸福」そのものだろう。

顕彰会(島津教恵会長)は千代の命日に当たる10日午前9時30分から千代の菩提寺である岩国市川西の教蓮寺で千代の冥福を祈る「薄桜忌」法要を行う。本堂での読経に続き、境内に建立された千代の墓の前で線香を手向け、千代が好んだ「桜井の訣別」をラッパと共に合唱。続いて生家に移動、仏壇に手を合わせると、